

共産主義者とアナキストの対立

— 2 —

ホセ・ペイラツ

マルクスとバクーニン

マルクスの行動基準は第一インター誕生の時に重要性をもった。この場合も彼はすでに走り出した汽車が公用地にさしかかってから飛び乗ったのである。インターの指導者たちが今日まであちこちで言明してきたことに反して、インターナショナルの思想はマルクスとマルクス主義者からは完全に離れている。逆にブルードンに關して、同じこと、つまり眞の創立者たるブルードン派もそうだとは言えないのだ。思想はすでに実践に移されていたから、A I T の呼びかけが政治運動の優れた発射台になることであるのを理解した時には、マルクスも生来の黙殺癖を抑えなければならなかった。彼とエンゲルスが共産党宣言に仕上げたのも多分その政治運動のことであつたらう。

確かにバクーニンも、彼が多くの期待を寄せていた「平和と自由のために」というブルジョア進歩主義者の運動の無害性を知ってから、同じようにしたのではあつた。社会主義の權威主義的潮流とリバータリアン運動の間

に強い対立が生じたのはインター内部においてであつた。バクーニンはマルクスに賞讃を惜しまず、彼を師とさえ考へていた。他方では十九世紀前半の革命的諸事件とその後を生じた革命的諸事件、とりわけマルクスの行動を個人的に知っていたことが、すでにバクーニンの内部に燃えていた炎をあおるようなことをしなかつた。

バクーニンはマルクスより四十年長で、ドイツ哲学に彼とほとんど同じ造詣を持ち、ヘーゲルとフォイエルバッハを修めていた。しかし、彼らの結論は、長い目で見ると正反対だつた。どちらもプロレタリア階級には屬さなかつた。マルクスはブルジョア知識人だつたし、バクーニンは貴族の血を引く没落した大地主の家の生まれだつた。

バクーニンの生涯の最初の時期は彼と密接に結びついてゐる平凡な農村で展開された。この最初の時期はおそらくその後の彼の氣質の發展を無縁ではなかつただろう。農村生活の外で生まれたマルクスとエンゲルスは純粋な知識人だつた。エンゲルスは産業ブルジョア階級に親類をもつていた。どちらもバクーニンの、カルデロン流

に言う「と農村で「生まれた罪」を、平凡な農村の素朴な生活の中で初めての政治的不安を抱いたことを、許さなかった。悪い意味で投げつけられる「プチブル的」という形容詞を、マルクスとエンゲルスはふだんから腹に据えかねていたのかもしれない。

マルクスの誠実な友達で出資者でもあったエンゲルスは、実業界のボスのような存在だった。機会あるごとに彼の不快をブルードンに向かって発散させた。多分あまり適当な標題ではないのだろうが「生活様式の問題に寄せて」で、彼は競争相手を巧妙に中傷している。

「ブルードンにとっては——とそれには書いてある——、最近百年間のすべての産業革命が、蒸気も大量生産も、労働を機械に置き換え、労働の生産性を千倍も高めたのに、実際起きるはずでなかった何か不愉快な出来事を意味するのだ。ブルードンのような小ブルジョアジーは、一人一人が孤立し独立して自給自足する、直接消費的で物々交換的な世界を望んでいる……。しかし、ブルードンの世界的この最良のものも、産業の急激な発展の足によってすでに胎児うちに踏み潰されてしまっている……」この描写には故意の誇張がある。ブルードンは人間にふさわしい世界を望んでいた、ただそれだけのことだ。彼の見せかけのプチブル性は世紀二千年の社会の現実の

有為転変の中で、消費社会の反対者の中に、環境汚染反対運動の中に、強力な支持者を見出した。彼らは遺伝学的、生態学的に有害な現在の産業文明を（マルクスとエンゲルスに反対して）罪悪であるとする。そしてまたマサチューセッツ工科大学の学者グループの不格好な悲観論や、シコ・マソー氏とかの物議をかもした声明などにも支持者を見出している。この声明には一九七二年のフランス共産党の司祭たちから反論が出て、先の声明に劣らず物議をかもしているが。

不和の原因

「マルクスは一八六四年に国際労働者協会を創設した。」そうレーニンは断言した（レーニン『マルクス、エンゲルスとマルクス主義』、メキシコ、一九六〇年）。創設者の資格は規約の編集（マルクスは整理しただけだ）と趣旨説明だけで十分であるなら、確かにマルクスはインターナショナルの最高創設者である。だが、そういうリーダーシップの帰属はいっそうあいまいな結果を生じる。ウィクトル・ガルシアは著書『労働者インタール』（カラス、一九六四年）で、初代赤色ツァーリの根拠のない単なる言明よりもはるかに権威のある歴史的批判的資料を用いて、その出生の消息をかなり徹底的に明らかに

している。労働者インタールの着想は、階級闘争と同じく古い古いものではあるが、最高の賞はフランスのプロレタリアートと彼らを代表してサンマルタン・ホールの準備集會に出席した者たちに与えられるべきである。この集會の代表たちは旅行カバンにブルードンの連邦主義の空気を詰めてきた。そして、帝政フランスであらゆる組織化の欲求を未遂に終わらせた特殊な政治情勢がその時永続しなかったら、インタールナショナルはどう見てもパリで連邦主義的社会主义者すなわちアナキストの潮流によって直接設立されていたであろうことはほぼ確かなのだ。

フランスに存在した特殊な事情は、A I T創設後に、マルクスとエンゲルスがナポレオンの贈り物と呼んでもいいその勢力圏（サンディカは改良主義的で革命は無気力なイギリス）に落ちついてからの、マルクス主義者の乗っ取りを容易にした。マルクスとエンゲルスは汽車が出発するのをぎりぎりまで見物していてから、あわてて客車に飛び乗ったのだ。それまでは彼らは懐疑的な距離を保った日和見主義者にとどまっていた。

第一次総務委員会への参加を機会に、彼らはその水力を自分の権威主義的水車に引いていこうとした。肉も骨もなく皮ばかりになっていた共産主義者同盟の崩壊を、

インタールに出した手で復旧しようという、考え抜かれた目的からだった。インタールナショナルは知識人の贅肉以上の何かであった。具体的大衆の運動と、権力の政治行動に対する敏感な基盤を約束していた。この欲望はマルクス自身による創立の「挨拶」から表明された。その中ですでに「政治権力の奪取はしたがって労働階級の大きな義務になってきた」と語られている。

インタールナショナルに対するマルクスの父権があいまいさを免れないとすれば、逆にこの協会が、創立宣言そのものに不和の原因すなわち協会を葬るにちがいない毒を手始めに盛り込んだマルクスとその代理人の手で死ぬ運命にあったことは、疑いの余地がない。

協会を構成する陣営が表明していた無数の流派を考慮するなら、それらを結合する原則の最も賢明な方式は連邦制以外にありえなかった。それは参加各国の人格の承認を暗黙のうちに含んでいるからだ。連邦制の基礎は多様性の中の統一を保証する能力だけだった。

マルクスとエンゲルスは中央集権的で権威主義的な統一方式以外の方式を用意する能力がなかった。権威主義的心理は彼らに総務委員会を通じて、彼らのみならず行動で挑発した反対者たちの威光を失墜させるための策略を実行させることになる。

挫折したインターナショナル主義の理想に関する責任を公平に割り当てるために、親切な仲裁者たちは器用にある悲しむべき失敗をマルクス一派とバクレーニン一派のつまらない勢力争いのせいにしてしまった。両巨人の思想の両立が不可能であるにもかかわらず、バクレーニンの連邦制は共存の保証を提供していたが、マルクス主義者の権威主義的方式は反対に共存を否定していた。この戦略の要点は、自分で考える頭を持つ少数派に絶対に非寛容であることだった。大衆の陰謀の中で徒弟時代を踏み出した不均質の大細胞の均衡をとるには、マルクスは決して適任でなかった。

創立宣言以来A I Tにもちこまれた党派的（権力政党の）毒は、卑劣な策謀が展開され始めて以来表面化した邪推心を必然的に生じさせた。ロンドン会議（一八七一年）とハーグの総会（一八七二年）で、マルクスは彼の無益な政治方式のたがを締め直した。それは規約の第七条になった。このあさはかな意図のために上から多数派が事前にでっち上げられていた。スペインの正式代表は各代表団に代表される実質数に応じた投票を要求したが、無駄だった。横暴に対して断固として譲らない少数派は、仕方なく退場した時、有名な協会のために吊鐘をうち鳴

「ユー」の悲劇的事件はフランスのフェデリリストの代表団を長年の間論争から外していた。（ロンドン会議が同じ年にパリで開かれるはずだったインターナショナルの定期大会にとって代わっていた。）

ロンドン会議でも、のちのハーグ大会でも、マルクス派は総務委員会のほとんど公然たる独裁に対して立ち上がった反対者に対して不実な陰謀をめぐらすために、歴史の声の代弁者のように振舞った。ハーグで、各代表団は加盟者として登録されている組合員に厳密に比例した票決権をもつべきだと、スペインの代表たちが徒らに要求した時の明確な拒絶が、策謀の存在を、つまり不正にでっち上げられた代表団を沢山含む多数派が出席していることを暴露した。最良の証拠は、総務委員会がつくったスペインの代表団の替え玉で、マルクスの婿を代弁者とする分裂派の小グループを代表していた。この実体のない代表団が投票にはスペインの正統の代表団と同じ票数をもつのだった。マルクスが「歴史による党派心の淘汰」と呼んだのはこのことに違いない。

これらの細部を念頭に置くと、マルクスが前述の手紙の相手に引き続いて書いたことの記念碑的シニジズムが際立ってくる。「インターナショナルの歴史はまた、党派とインターナショナルに根を張ろうとする半可通の試

らした。このハーグの総会は、望ましくない競争相手のうるさい存在を一掃することを狙ったほとんど根拠のない非難によって、一連の除名を決定した。

カール・マルクスによると、「インターナショナルは社会主義的あるいは半社会主義的党派にとって代わるために設立された……当初の規約と創立宣言はそのことを明白に示している……」あまりに明白だったから、マルクスの党派的意図は、特にハーグ大会で起きた強制審査のちは、限られた資料による検討にも耐ええないのである。

私たちは一八七一年十一月二十三日、すなわちハーグ大会の要となったロンドン会議で、分裂のきざしが見えただけの時の、F・ボルトあてのマルクスの手紙を取りあげることになります。

マルクスはこの手紙の中でこう書いている。「労働者階級が独立した歴史的運動のためにはまだ成熟していない間は、党派は（歴史的に）正当化される。しかし、この成熟に達した時には、すべての党派は実質上、反動化する。」ほかならぬ自分のための弁明と解されたい。

マルクス・エンゲルス一派は、普仏戦争と「コミューン」の悲劇的事件によってフランスのプロレタリアートにもたらされた状況に助けられて策謀を進めた。「コミ

みとに対する総務委員会の絶えざる闘いでもあった（原文は下線が引かれている）。この闘争は大会と、さらに多くの部会をもつ総務委員会の特別会議において展開された……」「パリではブルードン派（共済組合主義者）が協会の創立者の中に入っていたので——とマルクスは続けている——、最初の数年間は彼らが実権を握っていた……。」

つまり、最初の数年間協会で多数派を占め、創立者の中に入っていたブルードン派が、マルクスからはただの党派とみなされていたというわけだ。この手紙をさらに読み進むと、一八六八年に「ロシア人バクレーニンがインター内部で彼自身の指導の下に『社会民主主義者同盟』と称する第二インターナショナルをつくるために」インターナショナルに加盟したとある。

もっと正確に、加盟申請よりずっと前にその同盟をバクレーニンがつくっており、総務委員会がいろいろ逃げ口上を使った揚句、同盟は事前に解散されると言う条件で、また事実解散されたから、彼の加盟を認めるとは言われていない。バクレーニンのイデオロギー的人格については、私たちはこの手紙の中で次のような描写に出会う。「バクレーニン、理論的認識の全くない男……彼の綱領はプチブル思想を上面だけはぎ合わせた断片でできていた……」

これらの断片の中には、サンシモン流のたわけとみなされた「階級平等、相統権の廃止」や、「義務的教義としての無神論」、「基本的教義……政治運動の（ブルードンの）放棄」などがあつた。

「科学的社会主義を創始した天才」は、このように他の社会主義的潮流を、彼に非常に接近しながら恐怖を覚えた者や、マルクスがまだこの世に生まれていなかったから彼に許しを乞わずに何年も彼より先んじた者も含めて、軽蔑した。

マルクスはバクーニンと彼の思想について審判者の如く振舞い続ける。「この無邪気な寓話はイタリアとスペインで好意をもって受け入れられた（そしてある点までは今日でも支持されている）。これらの国では労働運動の实情はほとんど発展していない。またイタリア側スイスとベルギーの若干の間抜けで野心的で頭の悪い空論家の間でも受け入れられた。」

矢面のスペイン

別の理由でマルクスの冒険について行かなかつたイギリスを除くと、彼の冒険は、本来の労働運動がインターナショナルを正しく構成する国々をやつと運び出したばかりだつた。フランス側スイスには、ティエールと血を

好む彼の捕吏に執拗に追われるフランスのインタナショナルリストが亡命しており、スペインでは政府から追放すると脅迫されながらも、具体的な意味でのインタナショナル部会と言うべきものが全盛期にあつた。

マルクスは、その著作の軽蔑的な調子にもかかわらず、そのことを知っていた。一八七一年の秋にスペインの代表アンセルモ・ロレンソがロンドンを訪問したあとは、なおさらそうだつたはずだ。その時彼は、この代表の信任状がただの紙切れではなく、加盟者一人一人と照合しうる偽りのない資料であることに気づいたに過ぎない。

バクーニンは革命的社会主義にとってスペインの「開拓者」だつた。それについてはポルトへの手紙にマルクスの怨みが表われている。この手紙で彼の言うところによると、労働運動の实情はまだほとんど発展していないかつた……。ここには以下に見るように科学的社会主義の洞察がまさに欠けているのである。

鬱積した科学的な怨みに操られるマルクスとエンゲルスは、スペインを、経済的政治的にそうだからといってイデオロギー的にも遅れた国だと考え続けた。マルクス主義の隠語で経済の後進性は社会主義に絶対に適さないことを意味した（一九〇五年と一九一七年のロシアは教皇の特免というわけだつた）。この観点に従えば、

ドイツとイギリスと、フランスがやつと、産業国であるという理由で革命の条件を提供しているだけだつた。産業化されているということは、優れて革命的な階級、プロレタリアートを産み出す能力と同義語だつた。

封建制の根強いスペインのような国は、科学的昇占いによると、プロレタリアートあるいは「階級的合意」をもつ労働運動を出現させることはできないのだつた。プロレタリア化の過程はまず産業的段階を通過し、そして多分、階級政党、プロレタリア独裁、最終目標としての社会主義革命へ向かう宿命的で絶対確実な路線はルンペンプロレタリアの段階を通過しなければならなかつた。

「理論的知識を全然持っていない男」バクーニンは、そういう目で物事を見ないという冒瀆を犯していた。とりわけ、イサベル二世を廃位した一八六八年九月の革命ののち、バルセロナとマドリッドに彼の信頼する人物ジセップ・ファネリを敢えて送り、私たちのようなつまらぬ歴史家まで知っているような驚くべき成果を上げたことが冒瀆であつた。

彼らが処女地に踏み込んで偉大な成果をあげたことを確認した時、マルクスの怒りは止まるところを知らなかつた。彼はおそらく、自分がA.I.T.の総務委員会で占めている特権的地位なら損失を取り戻すために十分だと考

え、ジュラの職人の間や封建的なイタリアとスペインで抬頭しつつかつた彼の中央集権主義を強調した。

フランスを陥れた恐るべき動乱とヨーロッパにおける反動の波は、彼に必要な免罪符を与えた。彼はスペインに、総務委員会に属していた婿を代理として派遣する一方、彼に恐るべき陰をなげかけていた二人の人物ジャコブ・ギョームとミハイル・バクーニンを除名することにした。

バクーニンは、ツァーリの地下牢に繋がれていた時すでに重大な非難的にされていた。マルクスはロシア人に常に恨みをもっていた。少なくともロシア人は彼にとってにはスパイであり、職業的挑発者だつた。すでに名前が出たJ・モリトルは次のように説明している。ロシアの平原のこの裕福な地主は、マルクスが具現している大義のために自分の土地や屋敷を売って全財産を寄付すると約束した。だが約束を果たさなかつたので、シナイ山の神は「騙された」と感じた。ロシアのすべてのことに對する彼の恨みは、他の恨みの中心に巣くって生涯彼につきまといつた、と。

寛容の巨人であるバクーニンは、シベリアの流刑地を逃れて余儀ない漂泊から帰つたあと、マルクスの汚いやり方を許した。義務として、競争相手の最高の労作であ

る有名な「資本論」の翻訳を申し出さされた。それはすでに師とした人物の優位を謙虚に認められたことであつた。

しかし、彼の思想がシベリアの墓地の外を旨ざし始めた時、彼はすでに危険な道を踏み出していたのだ。この脱線をマルクスは彼独特のやり方で、一八七二年一月二十四日のT・クノあての手紙で断定している。

「……バクーニンは、国家が資本の創造者であると言ふ。」「一方、われわれはその正反対のことを支持している。あらゆる生産手段の少数者への集中である資本を倒し給え、そうすれば国家はおのずから崩壊するのである。」「(『O・マルクス、F・エンゲルス選集』第二巻、モスクワ、一九五五年)

バクーニンはインターナショナルに並ぶ組織、社会民主同盟を、少数のアナキスト分子と創立し、のちにそれをインターナショナルの中に創出しようとした。同盟の大罪はインターナショナルの大義のためにスペインを開拓したことだつた。マルクスは自分の処方に基ついて、スペインで発生していた革命的諸事件を軽視し、また、一八四〇年以来スペインの労働者が彼らの萌芽的な抵抗組織の政府による承認のために絶望的に闘っていること、アンダルシアの広大な農村地方は絶えざる反乱の炎をあげていることを忘れていた。

弾圧に対してスペイン部会を保護するための盾でもあつた。サガスタ政府は、コミューン以来西欧のすべての政府が出していた弾圧指令に実に敏速に応じたからである。

名指しの非難

一世紀の政治社会史を貫く共産主義者とアナキストの対立を最大の代表的人物の個人的確執のせいにするのは、したがって軽薄である。問題は生身の個人的対立そのものではなく、正反対の概念の世界のことである。人身攻撃の色合いが生じたのは、学究的努力を通じて不一致を解消することができなかった二つの勢力、一方のリバタリア、他方の権威主義者の、激突の結果だつた。リバタリアの精神とどんな群小の暴君とのヴェルサイユの儀礼も不可能と決まっている。共産主義者とアナキストの対立も、自由の問題を個人的集团的にすり違え、転倒させ、ごまかした権威主義者一派の社会政治的行動が介在しなかつたなら、生じなかつただろう。

アナキストを除けば十九世紀の自由主義者の大半は唯物論者だつた。その輝かしい世紀の自由を考察の闘士たちが私たちに遺してくれた科学的の原則にアナキストが断固として執着したことを知るには、リバタリアのすべての文献に目を通すだけでいい。無神論も問題とはな

マルクスは遅ればせながら打撃を与えてバクーニン主義者の手からスペインを奪回しようとした。彼はバクーニン一人を倒せば十分だと考えたらしく、そのために厭うべき手段を使った。すなわち、再度の中傷である。この時は彼の根強い反ロシア的偏見の例外として、ウチンと称するロシア生まれの陰謀家の言うことに従つた。同時に、同盟の問題について、まだ解散されていないし彼に対する別の権力として永続していると非難して、せいぜい罵倒した。一八七一年の会議ですでに展開されていたこれらの中傷はそこで行き詰まって、ハーグ大会に持ち越され、すでに述べたような結果となつた。大会の資格のない会議が、一定の限度を越える理由はなかつたことを指摘する必要がある。

同盟を解散する約束が形式的にしか果たされなかつたことは疑いの余地がない。この点ではマルクスが正しい。しかし、これが形式的でしかなかったのは、総務委員会の中央集権的権威主義的政策の原因ではなく結果であつた。この権威主義的政策のために、インターナショナルのリバタリア勢力は同盟の盾で身を守ろうとした。それはマルクスが攻撃のために総務委員会の堡壘に身を寄せていたのと全く同じである。

スペインについては、同盟はサガスタ政府が開始した

らなかつた。したがって、激烈な反教権主義の煽動を多少ともフリーメーソンの共和主義のあらゆる領域に譲つたとはいへ、アナキストの側からの一致もあつたのだ。マルクスが過去と未来のあらゆる科学と知識を獲得して、他人をすべてあわれな「お人好し」と軽蔑するようになるまでは、おとなしく彼を世界のへそと思わせておいたのだ。事がややこしくなり始めたのは、彼が頭でっかちであることをやめて幼稚な流派を徹底的に追い出し始めた時からである。それでも問題は論争の域を出なかつた。しかし、それほどの攻撃準備をして彼がどこまで行くのか考え始めた時、アナキストは初めて警戒体制を敷き、彼を名ざしで非難するようになった。

大作家ステファン・ツヴァイクが『賭博師』という題で優れた本を書いている。ウナムノはすでに——チェスというごく人気のある遊びに反対して——最も下賤で卑しいものの一つだと主張していた。彼は子供の時から村のカジノで二人のチェス指しがチェス盤の両側から「ちよつとずつ」齧り合うのを眺めていたのだ。「お前がこの「塔」を食ったら、お前の「女王」を食ってやるからな。」

さてツヴァイクの賭博師はゲシニタポの独房で徹底的に訓練されていた。恐らく単調な独房にいつまでも知

れず世界から遮断された、余儀ない沈黙と無為の恐るべき世界から逃れるために、賭博師のいんちきを、言ってみれば、道楽にするようになった。チェス盤も駒も、彼に次の手を催促する相手さえなしに、自分を相手に心の中で遊んでいるうちに、頭を半分に分け、この際限のない遊びの空想の勝負をつけることができるようになった。チェスの闘士が盤を前に目を開いていてもめったに読むことができない勝負を、想像力で操れるようになった。自由になった時、身に具わった習慣の徹底した技巧が大西洋横断航路の船に否応なく職を得させる。その船では客のグループとチェス試合の奴隷になった世界のチャンピオンの間で熱戦が展開されるのだ。チャンピオンは駒を動かしてから相手に手を考える時間を与えるために引っ込む。こうしたやりとりの間にチャンピオンは翼を仕かけた。成駒とちつとも変わらない。この誘いは誘惑的だから、しばらく考えてから相手はその歩を動かすつもりになったようだった。いわくあり気な人物が遮った。「皆さんそうしちゃうけませんよ。毒の入った御馳走だといふんです。その歩を動かしたら、二、三手で負けてしまいます。別のこれを動かさない、それからこれ。もう一つこれ。そうすれば勝負を御破算にできます。」その通りにしたところへチャンピオンが戻ってきて、

プロレタリア独裁ののち、国家は熟した果実のように衰滅するだろうとそれは述べていた。このアナキストの鋭い目は、衰滅したり熟したりした果実はすべて種子を象徴し、その種子は再び芽を出して自分を生んだのと同じ樹を最後に再生させることが使命であるということ、十分に知っていた。

クノへの手紙の一節は（「バクーニンは独創的な理論を持っていて、それによると、打倒しなければならぬのは資本ではなくて国家だそうだ……」。「……一方、われわれはその反対のことを主張している……」）、問題の真髓を提起している。もはや二人の対戦者のいざそれが革命の盤上で妥当であるかに関する抽象的思索の問題ではない。国家の廃絶が自動的に資本主義の崩壊をもたらすか否かが絶対的に明らかになってはいないことは認めよう。しかし、ソヴィエト国家による資本主義の廃絶が国家の消滅の兆しすらつくらなかったことは疑問の余地がない。ボルシェヴィキの実験や、東欧、広大な中国その他多くの地域における赤軍による資本主義の打倒のあとで、なお敢えて反対のことを主張する者があるだろうか？

資本主義体制の消滅が、アナキズムにとって革命の大問題を意味しなくなつてから久しい。ロシアで消滅した

盤を一瞥し、数秒間ためらつてから目をあげ、憎悪の光を宿した目で群衆の中に自分の手を見破つた出しゃばりな天才を捜した。

私たちを患わせてきた勝負では、チェスのチャンピオンがマルクスで、「挑戦者」がP・J・プールドンである。大した知識もなしに直感に導かれて、この田舎者のプチブルは枝葉の茂った学術的体系の奥に巧妙に隠された権威主義の奥の間を隅なく見透したのだ。

腫物に触れる手

バクーニンはさらに前進して、国家の問題につき当たった時、階級闘争というマルクス主義者の戦略に痛烈な一撃を食らわせるまでになる。勝負はすべて次のことであつた。すなわち、社会主義の最終目標は国家の廃絶にあるというマルクスの誠意を信用できるか否か？ バクーニンがこの点でマルクスの誠意を一度でも信用するようになっていたら、彼は根本的に態度を改め、多分彼の商売敵に会つてもいただろう。マルクスの権威主義的素行はこのロシア人に疑惑の余地を広げさせるために大いに与るところがあつたであろう。この疑惑から出発して、彼は共産党宣言の中にある国家の自然消滅に関する断言が心付けに過ぎないことを確信するに至つた。無期限の

のは単に資本主義の私的形態だけで、資本主義はそこでは国家資本主義形態の下に生きのびていることをさしおいても、「反資本主義」のうたい文句は他のうたい文句（反帝国主義、平和主義、等々）と同様、共産党の宣伝機関の材料と考えなければならぬ。永遠に迷える者、偽瞞に強情に固執する者、多少の差はあれ機関の圏内で行動する専門家、予言者の予言を盲目的に信じるために生まれてきた者だけが、どう偽装されていようと国家の存在の中にこそ私たちの自由への永遠の脅威があることを知らずにいられるのだ。

これほど重大な問題におけるアナキストの予感、常に腫物に触れていたから、マルクスとあらゆる時代の彼の入信者にとっては疎ましい存在だった。その予感は、マルクス主義者全般と特に共産主義者が宣伝分野においてさえ国家の破壊というかつての常套語を放棄したことを見れば、立証されたも同然である。マルクス主義のいかなる流派もはや自発的に国家の破壊の必要を語らない。国民国家に至つてはなおさらで、それはソ連の好戦的帝国主義を支える現代のソヴィエト・ナショナリズムが示すとおりである。反対に、この点では何年も前から、その弁証法はますます加速度的に国家の暴虐的機能を拡大しつつある。

すでにマルクス、エンゲルスの時代に、エンゲルスは共産党宣言の反国家的宣言を努めてごまかそうとしていた。今日私たちの時代も含めて非常に流布している彼の労作（『権威について』）の中では、反権威主義的態度を茶化して、（巧妙に）組織と管理の機能を国家のそれ（軍隊、官僚制、警察、等々）と並べようと意図されてゐる。

国家の破壊がマルクス主義的用語法から外された時、共産主義者はさらに前進した。革命の国のマルクス主義指導者レーニンは、自由の有害性を唱えた最初の人物だった。そして一には必ず二が続くものなのだ。「何のための自由か？」という彼の有名な表現は、人間が人間をみつめることを指弾する倫理的徳をブルジョアの偏見として否定するに至らしめた。

共産主義ロシアでは、無能な国家官僚制、政府一党の暴虐的な中央集権主義、警察の極端な残忍性、「プロレタリア独裁」の痛烈な皮肉は、かつてのブルジョアジー後遺症として、あるいはありとあらゆる口実を使って説明されてきた。だが事実は唯一つ、私的公的側面における資本主義の純粹素朴な消滅が、国家の消滅に通じるどころか、圧迫者と被圧迫者という伝統的な二つの階級に紛れもなく分断された社会の中心における独占的で全能

な国家に帰着したのである。ソ連邦とその衛星諸国の圧倒的多数は、その不安を表明し抗議を叫ぶための声と票を持っていない。新たな専制の代表的煽動政治家に対してアナキストほど執念く食い下がり、鋭く攻撃し、辛辣に責めた者はいなかった。アナキストは、マルクスに新しい絶対主義の危険を警告したブルードンの時代からスペインのアナキストに至るまで、そうしてきた。ルイス・ファブリ、エンリケ・マラテスタ、ルドルフ・ワッカー、エマ・ゴールドマン、アレクサンドル・ベルクマンらは批判者として通っている。スターリンの広い背には共産主義のあらゆる倒錯が負われて、世界をあきさせただが、その荷は今も増えつづけている。スターリンの死後、これらの倒錯が尊厳を敢えて回復しようとする全民衆を犠牲にすることによって繰り返され、彼らは戦車の音楽と、ダンテが地獄に下りて詠んだ一句「ここにあらゆる希望を残せ」によって報いられてきたことを、私たちは見てきた。

社会主義の名による反社会主義路線、共産主義の名による反共産主義、革命の名による反革命、解放の名による自由の破壊を暴露することは、私たちアナキストにとってはいとも簡単な事である。それというのも、この線はカール・マルクスからレーニン、スターリンを経てブレジネフに通じているからである。

次号完結（今村五月訳）

リベルテール 一部 100円

Le Libertaire 毎月一回15日発行

昭和49年1月15日発行 Vo. V No 2

編集兼発行者 三浦精一

発行所 東京都練馬区大泉学園町2190

萩原晋太郎方

リベルテールの会

(振替東京133830番 三浦精一)